技を伝え、夢をつなぐ ― 女性委員による技術者インタビュー ―

技術者奮闘記

Vol.1
河北潟放水路
防潮水門建設工事
清水建設株式会社

―監理技術者として試行錯誤の毎日 完成した構造物が姿を現したとき 大きなやりがいを感じます―

監理技術者

三上 尚美 Naomi Mikami

清水建設株式会社北陸支店　土木部
河北潟放水路防潮水門建設工事作業所
工事長／監理技術者

2009年入社　39歳
大切にしていること：
- 思いの通じるコミュニケーション
- 相手の立場に立って考えること

趣味：
- 旅行、ジム･ヨガ･ゴルフ等の運動、読書

作業所メンバーとのイベントマラソン大会

農業・農村の未来を支える土地改良事業。その最前線では、技術者たちが地域の声に耳を傾けながら、さまざまな課題の解決に取り組んでいます。

新企画「技術者奮闘記」では、現場で活躍する技術者の歩みや仕事への思いを通して、その魅力に迫ります。

今回登場するのは、監理技術者として現場を率いる中堅の女性技術者。女性監理技術者がまだ少ない建設業界において、品質・安全・工程管理に加え、多くの関係者との調整を担っています。人とのつながりを大切にしながら課題を乗り越え、信頼を築いてきた経験は、これから土木分野を目指す学生や若手技術者にとって大きなヒントとなるでしょう。

インタビュアー　都田真理恵（奥村組）、山科みづほ（前田建設工業）、小宮山春菜（アルソシア建設）

私の経歴書

	職歴
	土木建設工学科 一般土木 卒業
2009年	入社
1～3年目	内勤（積算、技術）
4年目以降	現場勤務
	新幹線関連工事3件 工事担当
	農業用水工事1件 工事担当
	造成工事1件 工事主任
14年目～	水門工事（現在）1件 監理技術者

※2026年現在　入社18年目

インデックス

「私の原点」 10ページ～
「働く環境の変化」 10ページ～
「現場経験を通して積み上げたもの」 11ページ～
「工事概要」 7ページ～
「監理技術者として」 8ページ～
「信頼でつながる現場」 9ページ～
「信頼を築くコミュニケーション」 12ページ～
「一人一人を取りこぼさないチームづくり」 13ページ～

ココ見て！ 三上さんの「コミュニケーションのコツ」

工事概要

塩水の侵入を防ぐ水門は地域農業の生命線

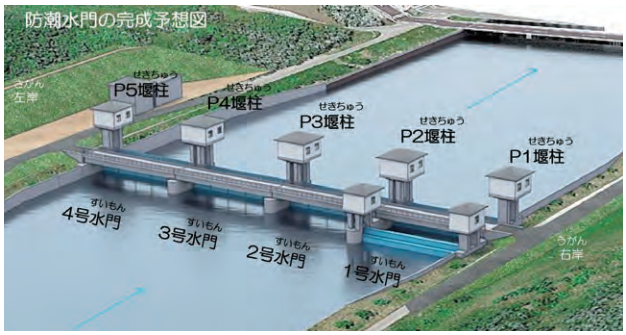
工事内容と特徴

本工事は既設水門の上流側に新たな防潮水門を建設する工事です。

河北潟と日本海を結ぶ放水路に設置されている既設水門は、海水（塩水）が川を遡上して農地へ侵入するのを防ぐ役割を担っています。しかし、建設から約60年が経過し、老朽化が進行しているうえ、十分な耐震性能を有していないことが課題となっていました。そこで本工事では、既設水門の上流側に新たな防潮水門を建設する更新工事が進められています。

対象地域である河北潟周辺には造成された干拓地もあり、農作物の生産が行われる重要な農地です。そのため、塩水の侵入を防ぐ本水門は、地域農業を支える生命線ともいえる施設です。

防潮水門は河川内に構築されるため、川の中に5本の堰柱（柱）を設置し、その間にゲートを取り付ける構造となっています。なお、水門のゲート本体は別途設備工事として発注されており、本工事ではそれらを支えるコンクリート構造物の施工を担当しています。



防潮水門の完成予想図

完成はいつ頃になりますか？

工事は2022年６月に着工し、現在で約４年が経過しています。本工事は分割施工で進められており、最終完成は2031年を予定しています。

全体工程は約114ヶ月に及び、河川内施工を４期に分割して進める計画です。現在は第1期施工が完了し、仮締切を撤去した後、第２期として新たな仮設構造を構築し工事を進めています。

河北潟放水路防潮水門建設工事　概要

工事件名	河北潟周辺農地防災事業 河北潟放水路防潮水門建設工事
工　　期	一期工事：2022（令和４）年６月27日～2025（令和７）年２月28日
	二期工事：2024（令和６）年３月14日～2028（令和10）年３月10日
施工場所	石川県河北郡内灘町大根布地内
発 注 者	農林水産省　北陸農政局

作業所の人員構成

作業所長（現場代理人）
三上さん（監理技術者）
工事主任（６年目職員）
工事担当（新入社員）
派遣職員２名
〈合計６名〉

元そば屋を改装した趣のある事務所

施工の流れ

1. 河川拡幅・地盤改良
2. 仮締め切り構築（島の形成）
3. 基礎杭（鋼管杭）打設
4. 掘削・遮水鋼矢板打設
5. 堰柱（底版・側壁・門柱・操作台）の構築
6. ゲート据付（別工事）
7. 操作室の構築および仕上げ
8. 仮設撤去・次期施工へ

主な構造

①堰柱
（ゲートを支える柱）
②操作室（ゲート開閉機械を設置）
③杭基礎（鋼管杭）
④洗掘防止のための護床（エプロンブロック）
⑤遮水鋼矢板（土砂の流動・吸出し防止）

監理技術者として

完成した構造物が姿を現した瞬間に感じる大きなやりがい

現場での仕事内容

現場管理（出来形・品質・工程管理など）を全般的に行い、発注者協議、関係機関（水門管理者、他工事関係者）との調整なども行っています。今も1日の半分ほどは現場に出ています。

調整先の例

- 発注者（工事事務所）との定例会議（毎週）
- 着工前に発生土の仮置き場について牧草地管理者と協議
- 水中作業時は、「水門管理者」と密に連絡を取り合う
  （水中作業中のダイバーが、放水路の流水によって流されないようにするため）

監理技術者としての面白み、苦労している点

これまでは、工事係員や工事主任として、特定の工種を担当することが中心でした。しかし現在は監理技術者として、工事全体を統括しています。初めての経験ということもあり、業務範囲は一気に広がり、日々やるべきことの多さに追われています。正直なところ、「やりきれた」と感じる余裕はなく、試行錯誤しながら前に進んでいるのが現状です。

一方で、完成時の達成感はこれまでにない大きさがあります。現在の現場では、コンクリート構造物の施工後に足場を解体し、完成した構造物が姿を現した瞬間に、大きなやりがいを感じます。苦労が大きい分、その完成の喜びもひとしおです。

杭打ち作業中。整理整頓され、きれいな現場。

補足　監理技術者とは

監理技術者は、一定規模以上の工事で、工事全体をまとめる責任者です。

施工計画の作成、工程管理、品質管理、安全管理など、工事の技術的な管理全般を担当します。

また、下請会社への指導や監督を行い、工事全体が円滑かつ安全に進行するよう統括する重要な役割を担います。

※元請負の特定建設業者が当該工事を施工するために締結した下請契約の請負代金総額が5,000万円以上（建築一式工事は8,000万円以上）になる場合に当該工事現場に配置される、施工の技術上の管理をつかさどる技術者のことです。　〈一般財団法人　建設業技術者センター〉

仕事でつらくなった時は、以前自分が関わった、すでに完成している現場を見に行くことがありました。たとえば北陸新幹線の金沢駅の工事なのですが、わざわざ新幹線を使って現場を見に行っていました。駅の一部分ですが、とても思い入れがあります。今のように設備が整う前の状態を知っていることも含めて、施設が利用されている状態を見ることができるのも、この仕事の醍醐味かなと思います。

また、現場で一緒に働く若手社員の成長も、やりがいのひとつです。例えば、入社２年目の後輩が「足場が外れたときが一番感動します」と話してくれることがあり、自分と同じ感動を共有できていることに喜びを感じています。こうした経験を通じて、現場は「ものづくり」だけでなく「人づくり」の場でもあると実感しています。

監理技術者として働く中で、ワークライフバランスはとれていると感じますか？

夜勤もないですし、工事は週休２日契約なので土日も基本的にはお休みです。現場が稼働していなければ、休日に現場が気になってしょうがない、ということもありません。大雨の時などは、ウェブカメラで現場を確認することもできます。

「女性」技術者として働く中で、苦労したことはありますか？

「女性だから」という理由で仕事を制限された経験はほとんどなく、性別に関係なく任せてもらえていると感じています。その点では、非常に恵まれた環境だと思います。

一方で、女性がいることで現場の雰囲気が和らぎ、職人さんを含めたコミュニケーションが円滑になる場面があります。また、現場で細かな作業にも積極的に関わっていると、「よく頑張っているね」と声をかけてもらえることがあります。そうした声掛けが現場全体の意識向上につながり、結果としてチームの一体感を高める好循環を生んでいると感じています。

加えて、現場には「教えたい」という気持ちを持つ先輩方も多くいます。先輩方に素直に教わりながら関係を築くことで、チームの一体感や安全で円滑な現場運営につながっていると感じています。

社会を支える仕事の本質

農業土木の重要性と魅力を教えてください。

農業土木は、水管理や土地整備を通じて農作物の生産基盤を支える重要な仕事です。私が携わる干拓地の工事も、「加賀れんこん」などの安定した生産につながっています。食を支える社会基盤づくりに関われることが、農業土木の大きな魅力だと感じています。

そのため、単に施工をこなすのではなく、「この工事の先に何があるのか」を常に意識することで、仕事のやりがいもより大きくなり向き合い方も変わります。

信頼でつながる職場

作業所（職場）の雰囲気

上司と部下の関係性について

上司（所長）は以前も同じ現場で働いた経験があり、長く一緒にいる上司なので意思疎通がしやすいです。さらに、技術的にとても頼れる方です。

部下は、私の元には女性技術者が配置されることが多いです。会社からの意見を聞くと、新入社員など初期配属時は女性の先輩がいてくれた方が安心、という声もあるようです。話しやすいこともあると思って配置されているのかなと思っています。

左から久保所長、三上さん、石田さん

＼上司から／

現場代理人／作業所長
久保 晴雄さん

三上さんは、発注者や関係機関、支店スタッフ、協力業者と連携を取り、粘り強く現場管理を行っています。

本人のモチベーションや向上意識は非常に高く、得意先からの信用も厚い。また、持ち前の明るさで、現場事務所全体の雰囲気向上に貢献しています。今後は、北陸だけでなく東京などの他支店を経験し、土木技術者として幅広い知識を身に着けてもらいたいと考えています。これからも明るく元気に頑張ってください。応援しています。

＼部下から／

現場担当
石田 直己さん

三上さんは、常に現場や共に働く仲間全員のことを考え、行動される方です。

コンクリート打設作業で早出があった際も、私の担当であるにもかかわらず一緒に早出をしてくださいました。その時、「監理技術者も一緒に早出したほうが、職人さんたちのモチベーションもあがるでしょう」とおっしゃった言葉が印象に残っています。職員だけでなく作業員一人ひとりにも気を配り、周囲から厚い信頼を寄せられている、私が尊敬する上司です。

私の原点

身近な「ものづくり」から広がった視野

土木分野を目指したきっかけ

きっかけは、父が地元・福井で水道関連の会社を営んでいたことです。幼い頃から現場に連れて行ってもらう機会があり、家屋内の配管工事など、ものづくりの現場が身近にある環境で育ちました。

父のお手伝いでスタッフ持ちをしていました！

ゼネコンを志望した理由

大学進学の際に土木を選んだ理由の一つは、インフラ整備のスケールの大きさに魅力を感じたためです。人々の生活を支えるような規模の大きなものづくりがしたいと思いました。

現場説明をする三上さん

内勤から現場配属へ、地域限定採用から勤務地が全国・海外転勤対象とした区分

現場配属になったきっかけ

入社４年目に、１級土木施工管理技士の取得を見据えて現場に配属されたことがきっかけです。実際に現場で働く中で自分に合っていると感じ、継続を希望して以降は現場を中心に経験を積んでいます。なお、現在は全国・海外転勤対象の区分に変わりましたが、これまでの配属は石川県と福井県が中心です。

（全国）転勤についてのお考えを教えてください。

転勤の大きなメリットは、さまざまな環境を経験することで成長できる点です。地域ごとに異なる発注者や協力会社、異なる地盤条件や気候などの施工条件に対応しながら経験を積むことで、応用力の高い技術者＝どこでも通用する人材が育つのではないかと思います。

働く環境の変化

女性技術者の広がりと現場環境の変化

入社当時の働く環境

入社当時は、現場で働く女性は少なく、女性が内勤へ移るケースも多い時代でした。現在は性別に関係なく能力や適性で配置が決まり、現場で活躍する女性技術者も増えるなど、働く環境は着実に変化していると感じます。

現場での働く環境の変化

現場で大きく変わったのは設備面です。以前は女性が働くことを前提とした環境整備が十分ではありませんでしたが、現在は女性用トイレの設置などが設計段階から求められるようになり、働きやすい環境づくりが進んでいます。

これからの現場づくりに必要な視点とは

これからの現場づくりで大切なのは、実際に利用する人の目線で考えることです。

現在の環境は、先輩たちが現場の課題に向き合い、改善を積み重ねてきた結果です。以前は当たり前だった不便さも、現場の声によって少しずつ変えられてきました。多様な人材の意見を取り入れながら改善を積み重ねることで、より働きやすい現場が実現すると考えています。

近年、現場では多様な人材が働いています。印象に残っている経験はありますか。

現場で性的マイノリティ（LGBTQ）の方と一緒に働いた経験があります。

新規入場時の手続きの中で、見た目と戸籍上の性別が異なることが分かり、現場設備の利用について検討が必要になりました。例えばトイレの利用については、現場として一律に決めるのではなく、本人の意向を尊重することが重要だと考え、希望を確認した上で対応しました。

この経験を通じて、多様な背景を持つ人が働く現場では、一人ひとりの状況に応じた柔軟な対応が大切だと感じました。

現場経験を通して積み上げてきたもの

EPISODE 01 災害復旧の最前線で見た「土木の使命」

能登半島地震（2024年1月1日発生）の復興工事に従事

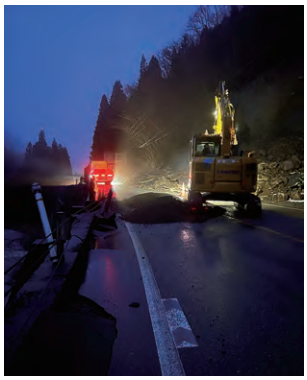
私が携わったのは、発災直後の道路啓開工事です。発災から2日後の1月3日に現地へ入り、地割れや崩落で寸断された道路を、砕石やバックホウを使って仮復旧し、避難や救援物資輸送のための通行ルート確保に取り組みました。「とにかく通れる状態にする」ことが私たちの役割でした。

現地では、避難車両と支援車両の集中による大規模な渋滞が発生し、通常2時間ほどの移動に約10時間を要しました。その渋滞の中で車線規制を行いながら、片側交互通行で作業を進める必要がありました。

また、電気・水道・通信が途絶えており、携帯電話もつながらないため限られた通信可能地点を探しながら連絡を取る必要がありました。

特に印象に残っているのは、「安全確保の難しさ」です。余震が続く中、夜間の山間部で作業を行うことも多く、「どこが安全か」を目視で完全に判断することはできず、音や状況を頼りに待機・作業を繰り返しました。崩落音が響く緊張感の中で、二次災害を防ぐことを最優先に施工管理を行いました。

さらに、重機や資材の確保も手探りの状況でしたが、国土交通省や各社が連携して対応し、昼夜を問わず復旧作業を進めました。トイレや休憩設備も十分ではなく、食料は事前に持ち込んだものに頼る状況でした。仮眠も限られた時間ですませながら、昼夜を問わず作業を継続しました。



昼夜を問わず道路啓開作業を行う様子

その経験を通じて感じたことを教えてください。

非常に過酷な現場ではありましたが、同時に土木技術の社会的役割を強く実感する経験となりました。限られた情報や資源の中で、多くの企業や行政機関が連携して課題解決に取り組む姿を目の当たりにし、災害時における土木の役割は「使命」と呼ぶにふさわしいものだと感じました。

EPISODE 02 信頼は現場でつくる。民間工事で学んだ「発注者との向き合い方」

これまでの経験の中で、特に印象に残っているエピソード

特に印象に残っているのは、民間の処分場造成工事です。私は工事途中から工事主任（次席）として着任しましたが、前任者が発注者から絶大な信頼を得ていたため、当初は「なぜ担当者が変わるのか」と厳しい言葉を受け、信頼がない状態、いわばマイナスからのスタートとなりました。

この現場は、既存の産業廃棄物処分場を稼働させながら施工を進める難しい条件に加え、遮水シート施工という品質管理上重要な工程を控えていました。民間工事は担当者への信頼が工事全体の評価にも影響するため、その重みを強く感じた現場でした。

どのようにして信頼関係を築いていったのですか。

最初は非常に厳しい状況でしたが、「目の前の仕事を確実にやること」に徹しました。幸いにも現場の職員や協力会社の方々は同じ方向を向いており、私の指示にも真摯に対応していただける環境でした。一つひとつの施工を丁寧に積み重ね、品質を確保し続けることに注力しました。

また、発注者とのやり取りでは、「書類や手続き中心」ではなく、相手の意図や期待を汲み取り、「直接向き合う姿勢」を大切にしました。その結果、工事終盤には「よく頑張ってくれた」「次もぜひ来てほしい」と声をかけていただき、約1年間を通じて信頼関係を築くことができました。

信頼を築くコミュニケーション

実務で活きる「泥臭さ」の重要性

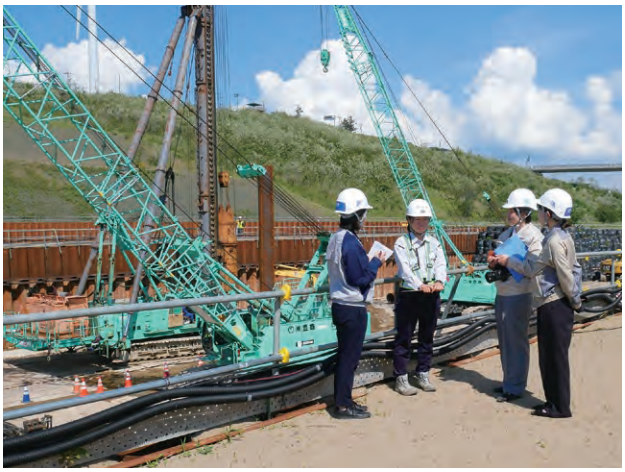
人と接する際に心がけていることや、コミュニケーションのコツ

コミュニケーションで大切にしているのは、一言でいえば「基本を丁寧に積み重ねること」です。ポイントはいくつかありますが、あえて分かりやすく言うと「泥臭いことの積み重ね」だと思います。

私が担当した産業廃棄物処分場では、工事車両が敷地内道路を通行していたため、落ちている小さな石一つでもすぐに指摘を受ける環境でした。そこで、現場をこまめに巡回し、気付いた汚れや異物は自ら清掃することを徹底しました。また、お客様や施設職員の方々への挨拶を欠かさず、日々のやり取りを大切にすることで、少しずつ信頼関係を築いていきました。こうした基本行動が、結果的に現場運営を円滑にします。

施工面でも、品質への向き合い方自体が重要なコミュニケーションです。管理型処分場では遮水シートの性能が非常に重要であり、接合部は全箇所を立会いで確認しました。厳しいコンサルタントの監理のもとでも、誠実に対応し、施工と記録を積み重ねることで信頼を得ることができ、発注者からの評価向上にもつながりました。

また、コミュニケーションは「言葉」よりも「姿勢」が重要だと感じています。同じ言語でも伝わらないことがある一方、互いに理解しようとする姿勢があれば、言語の違いを越えて意思疎通は可能です。大切なのは、相手の立場を理解し、共通の目的を持つことです。



現場インタビュー状況

土木の現場には多様な関係者が関わるため、私は相手に応じて伝え方を変えています。
例えば、

発注者	最終的に重視している品質や安全、コストに焦点を当てて説明する
協力会社	具体的な施工方法や作業手順を明確に伝える
若手社員	背景や理由を含めて理解しやすく説明する

といったように、それぞれの立場に合わせて言葉や説明の仕方を工夫しています。

若手の中には、悩みを抱えても相談できずに立ち止まってしまう人もいます。どのように相談しながら乗り越えてきましたか。

自分で調べても解決できないことは、これまで一緒に仕事をしてきた先輩や同僚に、できるだけ早く相談するようにしています。その際、必ずしも「今同じ現場にいる人」に限らず、これまでの経験の中で出会ってきた方々とのつながりを活かし、内容に応じて相談相手を選ぶようにしています。

相談相手のベースはこれまでの現場や業務で築いてきた関係ですが、先輩だけとは限りません。若手社員の指導方法について悩んだ際には、年齢の近い後輩や以前一緒に働いたメンバーに相談することもあり、立場が近いからこそ違った視点でのアドバイスをもらえることも多くあります。

現職種で求められる人物像は？

自分なりの軸（譲れないポイント）を持ちながらも、自分の考えに固執せず、柔軟に意見を取り入れることができる人だと思います。そして、チームを牽引するキャプテンや監督のような存在感を持つ人が求められると感じています。

一人一人を取りこぼさないチームづくり

目指す将来像

今後の建設業への期待

期待することが2つあります。

1つ目は、高度経済成長期に建設されたインフラ設備の老朽化への対応です。

2つ目は、頻発する自然災害に対応できる、強靭なインフラの整備です。

今後の目標

現在の目標は、現場代理人（現場所長）として現場を統括できる立場になることです。

そのためには工事全体を見渡す広い視野と判断力を身につけ、施工管理だけでなく、安全・品質・工程・コスト、そして人との関係も含めて総合的にマネジメントできる技術者を目指していきたいと思っています。

私には目標とする先輩がおり、その方の現場運営の姿勢に大きな影響を受けています。特に印象的なのは、「チームワークを何よりも大切にする」という考え方です。さまざまな立場や役割の違いで優劣をつけるのではなく、全員が同じ目標に向かっているという意識を共有することを大切にされていました。また、経験の浅いメンバーが一生懸命説明をしてくれた際にも、その意図をしっかり受け止め丁寧に向き合う、一人ひとりを取りこぼさない姿勢がチーム全体の力を引き出していると感じました。私もそのような所長を目指していきたいと思っています。

メッセージ

最後に、建設業を目指す若者、建設業で頑張る若者へメッセージをお願いします。

建設業を目指す若者へ

建設業で携わる仕事は、生活に直結するスケールの大きいものづくりです。完成した構造物は100年先の人々の生活にも貢献することができます。

大きなやりがいを感じることのできる仕事だと思います。

建設業で頑張る若者へ

建設業界は今、大きな転換期にあります。担い手不足や働き方改革への対応はまだ発展途上であり、技術革新には若者の新しい発想が大きな力になります。

「良いものづくり」を根底に、ともに建設業の変革を担っていただきたいです。

編集後記

写真左から　都田真理恵、三上尚美さん、山科みづほ、小宮山春菜

土木技術者としても人としても尊敬できる方。その歩みと未来への思いを伺えた貴重な内容で、多くの方にぜひ読んでいただきたいです。

都田真理恵（奥村組）

就職活動中の学生さんにも見ていただきたい記事になりました。全国のリクルーターの皆様、ぜひこの記事をリクルート活動にもお役立てください！

山科みづほ（前田建設工業）

監理技術者としての誇りを胸に、現場を動かすその姿に、深い感銘を受けました。貴重なお話をありがとうございました。

小宮山春菜（アルソシア建設）